



NEWS LETTER

International Institute for Advanced Studies

vol. **71**
May
2010

contents

報告  第66回理事会・第59回評議員会の開催
(3月23日)

紹介  2010年度研究プロジェクトの一覧

紹介  2010年度新規研究プロジェクト
(6課題)

報告  三間フェロー研究会
セルビア共和国よりハジェフスキー教授を招へいし、
フェロー研究会シリーズを開催

紹介  研究報告書紹介
「近未来の法モデルと法情報」を刊行

紹介  2010年度出版予定
「高等研報告書」・「高等研選書」刊行予定

 事務局だより

お知らせ  「春の叙勲受章者」と「新事務局員の紹介」

カレンダー  研究活動予定
(5月1日～7月31日)

カレンダー  高等研就業カレンダー
(5月～7月)



大掃除を済ませた修景池 2010.4.28 撮影

報 告



第66回理事会・第59回評議員会の開催 (3月23日)

3月23日に第66回理事会及び第59回評議員会を開催。2010年度（平成22年度）事業計画案及び収支予算案の承認、理事・監事及び評議員の選任、役員の選出が行われました。

1. 2010年度事業報告案の承認

■ 基本方針

尾池和夫所長を中心とする新たな研究所運営体制の2年目として、研究活動の充実・強化を重点施策に据え、公益法人としての体質強化と業務の推進を図ります。

また、2009年度中の新公益法人への移行準備を見直し、2012年度末頃の移行認定を目指して対応することとし、公益目的事業としての事業展開と、より開かれた研究所への検討を行います。

1) 研究事業の充実

厳しい財政状況でも本研究所の存在意義をさらに明確化するために、「学術の芽を見つけ、育てる」問題発掘型の研究事業のより一層の充実・強化を図ります。

また、研究プロジェクトの実施を通じて、大学院生等を対象にした若手研究者の育成を図る新たな事業として「学術道場」プログラムを開始します。

2) 公益事業に係る新たな取り組み

公益財団法人移行を踏まえ、公益性を担保する事業のあり方を見直し、その中で一部に新たな取り組みを行います。

3) けいはんな立地機関との連携強化

昨年度に引き続き、けいはんな立地機関との共催・後援事業活動などを通じ、相互の連携を強化・拡大し、地域社会への貢献度を高めます。

■ 事業計画の骨子

1) 研究プロジェクト

次の5テーマ領域に大別し、分野横断的な研究



会を組織する研究プロジェクトを18件実施します。（前年度からの継続プロジェクト12件、新規プロジェクト6件）

①言語と文学と芸術：継続3件・新規2件

②世界の構造変化と世界観の転換：継続3件・新規2件

③脳科学と心の科学：継続1件・新規1件

④宇宙・地球・人類：継続3件

⑤物質と光：継続2件・新規1件

学術の全領域にわたる多彩なプロジェクトを、5つのテーマ領域を基軸にグループ化しますが、内外の学術分野の動向に照らして見直し、編成替えを可能にするとともに、プロジェクト間の有機的な連携促進を行います。

2) 高等研学術道場プログラム

若手研究者、特に大学院博士後期課程の学生を対象に、上記研究プロジェクトへの参加に道を開く新規事業を開始します。

3) その他の研究事業として、国際フォーラム1件、覚書等に基づく共同研究等2件、研究者招へい事業及び専門の人材育成事業を推進します。

4) 高等研報告書及び選書の出版

過年度までに終了した研究プロジェクトのうち、13編を報告書として出版する予定です。また、一般公開講演会で好評を得た講演内容に基づく選書を4編出版する予定です。

5) その他公開事業として、公開イベント（公開講演会・茶会など）及び地域連携イベント（「けいはんな学研都市」立地機関との連携事業・合同施設見学会）等を実施します。

2. 2010年度収支予算案の承認

■ 2010年度財務運営方針

1) 資産運用収入

2010年度は、ほぼ2009年度予算と同額の6,850万円（運用利回り1.7%）としました。

2) 外部資金の導入

2010年度の科学研究費補助金特定奨励費については減額となった2009年度実績と同額の2,230万円を予算計上しており、従来と比べて1,720万円の収入減となります。この減少分を改善するために、さらに外部資金の導入に努めます。

3) 事業活動支出

2009年度は予算編成後に特定奨励費が減少したため本来実施すべき研究についても相当の圧縮を図りましたが、2010年度は、高等研の真価を世に問える研究成果を目指して、特定奨励費に拠らず一般財源による研究の規模拡大を予定しており、事業費支出では前年予算比4,000万円の増額としました。

また、管理費においても一時凍結してきた修繕等の増加もあり微増としたため、事業活動費全体では4,100万円の予算増となりました。

■ 収支予算

- ①事業活動収入総額 9,640万円
- ②事業活動支出総額 21,270万円
- ③事業活動収支差額 11,630万円（前年度比5,840万円増）

2010年度の実績収支は、事業活動収支差額に修繕積立金・退職給付引当金を加え、結果として、研究事業推進基金取崩しは、前年予算比5,859万円増の13,320万円となる予定です。

3. 理事・監事及び評議員の選任並びに役員の選出

理事・監事及び評議員が2010年3月31日に任期満了となるため、改選（任期2年：2010年4月1日～2012年3月31日）が決議され、役員の選出が行われました。2010年4月1日付役員名簿は下

記のとおりです。なお、評議員名簿は次号でご紹介させていただきます。（◎印の方が新任）

■ 理事長

立石 義雄 オムロン(株)会長、京都商工会議所会頭

■ 副理事長

津村 準二 (社)関西経済連合会副会長
矢嶋 英敏 (株)島津製作所相談役、(社)京都工業会会長

■ 専務理事

西村 耕一 オムロン(株)取締役室参与

■ 理事

荒井 正吾 奈良県知事
石川 博志 関西電力(株)顧問
磯貝 彰 奈良先端科学技術大学院大学長
位高 光司 京都経営者協会会長
尾池 和夫 (財)国際高等研究所長
大崎 仁 人間文化研究機構特別顧問
茅 陽一 (財)地球環境産業技術研究機構副理事長
川村 誠 京セラ(株)会長
北尾 哲郎 (社)京都経済同友会代表幹事
佐藤 行則 (財)国際高等研究所事務局長
田代 和 近畿日本鉄道(株)相談役
西口 廣宗 奈良商工会議所会頭
橋下 徹 大阪府知事
濱田 純一 東京大学総長
松下 正幸 パナソニック(株)副会長
松本 紘 京都大学総長
山田 啓二 京都府知事
◎山中 諄 (社)関西経済同友会代表幹事
鷲田 清一 大阪大学総長

■ 監事

岩田 直樹 (社)大阪銀行協会会長
柏原 康夫 (社)京都銀行協会会長
森田 祐司 有限責任監査法人トーマツ パートナー

今回の改選で退任された理事は下記の方々です。

中野 健二郎 (社)関西経済同友会代表幹事
米倉 弘昌 (社)日本経済団体連合会評議員会議長
野村 明雄 大阪商工会議所会頭

(社)日本経済団体連合会評議員会議長及び大阪商工会議所会頭のご交代に伴う理事の選任は次回の評議員会において行う予定です。

紹介



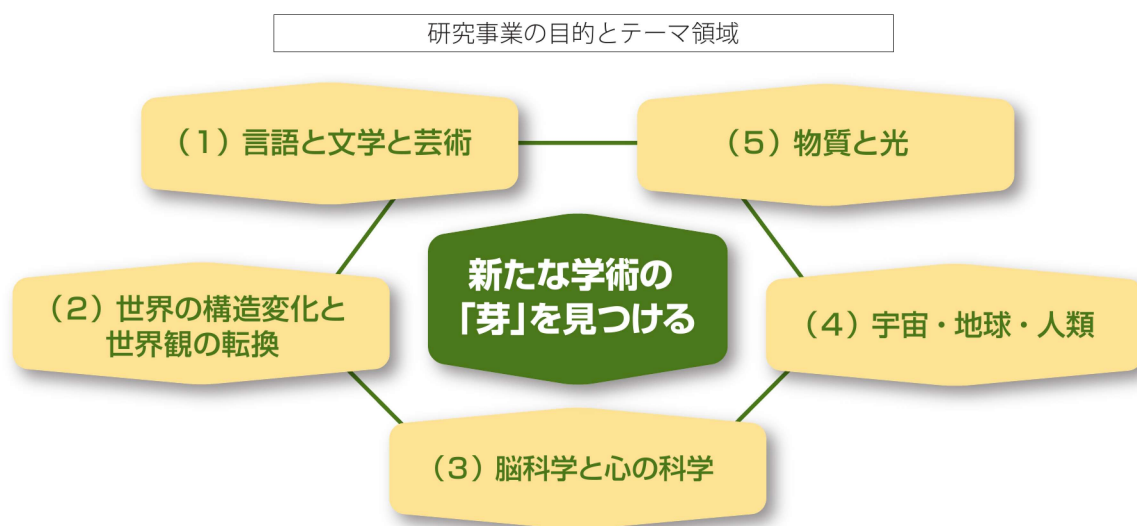
2010 年度研究プロジェクトの一覧

2010 年度は下図に示すように、本研究所の研究プロジェクトを5つのテーマ領域に大別し、cross-disciplinary な研究会を組織して研究事業を実施します。

学術の全領域にわたる多彩なプロジェクトを、5つのテーマ領域を基軸にグループ化しますが、企画委員会等における研究状況報告や意見交換・議論などを通じて、内外の学術分野

の動向に照らして、各テーマ領域に属するプロジェクトをたえず見直し、編成替えをするとともに、テーマ領域横断的なプロジェクト間の有機的な連携の促進を積極的に行います。

2010 年度においては、12 件の前年度からの継続プロジェクトに加え、6 件の新規プロジェクトをスタートし、以下に示す 18 プロジェクトを実施します。



(1) 言語と文学と芸術

この分野は、人類が純粋に創造する活動の分野である。なお、ここでの言語には数学の分野も含めている。進化の過程で人類は言語の能力を獲得し、それを基にして文学を発展させ、また言語と併行して心を伝える音楽や絵画等の芸術を生み出した。

21 世紀の人文科学が抱える、いまひとつの緊急の課題は、20 世紀後半に大発展をとげた言語学を、つぎにどのように展開するかという問題である。認知科学、脳科学との協力によって、言語現象の分析を通じて、「人間とは何か」というテーマに迫る研究が不可欠である。

①諸科学の共通言語としての数学の発掘と数理科学への展開（第2年次） ■ 研究代表者：高橋 陽一郎（企画委員／東京大学名誉教授・京都大学名誉教授）

②アジア・デザイン・エンサイクロペディアの構築（新規3年計画、第1年次） ■ 研究代表者：藤田 治彦（大阪大学大学院文学研究科教授）

③宗教が文化と社会に及ぼす生命力についての研究－禅をケーススタディとして－（新規3年計画、第1年次） ■ 研究代表者：天野 文雄（企画委員／大阪大学名誉教授）

④近代精神と古典解釈：伝統の崩壊と再創造（第3年次） ■ 研究代表者：手島 勲矢（企画委員／元同志社大学大学院神学研究科教授）

⑤受容から創造性へ－近現代日本文学におけるスタンダードの場合（第2年次） ■ 研究代表者：ジュリー・ブロック（企画委員／京都工芸繊維大学大学院工芸科学研究科教授）

(2) 世界の構造変化と世界観の転換

現代世界は、西洋近代に発するグローバル化の圧倒的な流れのなかで、アジア、とくに東アジアの台頭の目立つ世界の構造変化の時代となっている。しかし、アジアの台頭は、単に西洋起源の価値観を受容しているだけなのか、そ

ここにアジア的な価値観や世界観、歴史観、美意識などの再生がみられるのか。伝統的な人文学・社会科学は、この問題に正面から取り組むことに成功していない。ここに、人文・社会科学復興の根本的な課題があり、新たな学問分野の統合的な方法論の基礎と課題に取り組む。

- ⑥法と倫理のコラボレーションー活気ある社会への規範形成ー（第2年次） ■ 研究代表者：服部 高宏（企画委員／京都大学大学院法学研究科教授）
- ⑦21世紀における文化としての設計科学と生産科学（第2年次） ■ 研究代表者：岩田 一明（フェロー／大阪大学名誉教授・神戸大学名誉教授）
- ⑧交渉学の可能性ー新しい世界の関係構築と紛争の予防のために（新規3年計画、第1年次） ■ 研究代表者：松岡 博（フェロー／帝塚山大学法政策学部教授／大阪大学名誉教授）
- ⑨ジェンダーからみた家族の将来（新規3年計画、第1年次） ■ 研究代表者：姫岡 とし子（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
- ⑩数量的アプローチによる日本経済の比較的研究（第3年次） ■ 研究代表者：宮本 又郎（フェロー／関西学院大学専門職大学院経営戦略研究科教授／大阪大学名誉教授）

（3）脳科学と心の科学

生命科学の分野の進展の方向として、脳科学が急速に進展している。とくに記憶のメカニズムを研究する分野の進展は、必然的に心の科学の分野と脳科学の分野との強力な融合関係を求めている。そのような将来の方向を意識的に進めていくことがこの課題の主な目的であり、ここではいくつかの具体的な課題を設けて、今後の進め方を試行錯誤的に明らかにしていこうとするものである。

- ⑪絵画と文学に表象される、時間と空間の脳による認識（第3年次） ■ 研究代表者：近藤 寿人（大阪大学大学院生命機能研究科教授）
- ⑫意識は分子生物学でどこまで解明できるか？（新規3年計画、第1年次） ■ 研究代表者：山森 哲雄（企画委員／自然科学研究機構基礎生物学研究所教授）

（4）宇宙・地球・人類

宇宙における生命の発生と存在について、新しい科学研究の流れが生まれようとしている。

地球生命の起源と進化の探求、無人探査機による太陽系諸惑星と衛星の探査、そして太陽系外の恒星をめぐる無数の惑星系の発見という3つの分野における研究がめざましく前進したことによるものである。宇宙における生命の研究は、欧米諸国では既に本格化しはじめており、実験・観測・探査と結びついて、思いがけない展開を迎える可能性も増大している。宇宙における生命の研究は、ひいては地球上の生命を位置づけ直すものでもあり、21世紀の新しい総合的科学分野として発展すると考えられる。

- ⑬宇宙における生命の総合的考察とその研究戦略（第2年次） ■ 研究代表者：海部 宣男（放送大学大学院文化科学研究科教授／国立天文台名誉教授）
- ⑭天地人ー三才の世界：宇宙・地球と人間の関わり合いの新しいリテラシーの創造（第2年次） ■ 研究代表者：尾池 和夫（国際高等研究所長）
- ⑮文化財保全技術（第5年次） ■ 研究代表者：志水 隆一（フェロー／大阪大学名誉教授）

（5）物質と光

21世紀の物理学や化学の大きな課題の1つは、自然には存在しない新しい物質を創造することにある。この分野での cross-disciplinary なコミュニケーション展開のためのプロジェクトは、本研究所としては今までに、物質研究における多角的協力の構築から始まり、メタマテリアルの物理と応用、光工学との融合が議論されてきた。本研究課題では特に、新物質開発を担う物理、化学諸分野間でのプロジェクトを企画し、産学の有力研究者の参加を得て実施する。

- ⑯単分子エレクトロニクス現状認識と近未来実現へ向けての中核体制構築（新規2年計画、第1年次） ■ 研究代表者：畠田 博一（大阪大学大学院基礎工学研究科教授）
- ⑰ナノ物質量子相の科学（第3年次） ■ 研究代表者：金森 順次郎（上級研究員／山田科学振興財団理事長／大阪大学名誉教授）
- ⑱メタマテリアルの開発と応用（第2年次） ■ 研究代表者：石原 照也（招へい研究員／東北大学大学院理学研究科教授）

紹介



2010 年度新規研究プロジェクト (6 課題)

研究代表者 藤田 治彦 (大阪大学大学院文学研究科教授)

「アジア・デザイン・エンサイクロペディアの構築」(3 年計画)

アジアは世界の生産の拠点であり、最大規模の消費地でもあることから、アジアの生産と消費の動向は人類社会全体に大きな影響を及ぼしています。しかし、デザインのリーダーシップを握っているのは非アジア、西洋文化圏であり、アジアの人々は、工業製品等のハード面でも、ネットワークなどのソフト面でも、そのデザインにおいては欧米に依存しています。アジアには工芸などの専門技術や自然と調和した日常生活など、すぐれたデザインの伝統があるにもかかわらず、その良さを十分発揮できていません。

本研究では、このような状況の克服を目指し、アジアのデザインを総合的に捉えた『Asian Design Encyclopedia』(仮称・英文)を企画します。アジアの専門家が、各国のデザ

インの歴史と現状について分析と報告を行い、意見交換を通じて、エンサイクロペディアのありかたを検討します。また、デザインを、実務としてだけでなく、文化として考える、アジアの若い研究者の発掘や育成に努めます。いま、デザインの分野では研究の国際化が急速に進んでおり、アジアの若い世代が欧米の教育研究機関で活躍を始めています。そのような若手研究者も本研究の中心的メンバーに加えることによって、文化としてのデザイン研究の国境を越え、既存の領域を超える学問研究の「芽」とし、その研究を国際的に発信する日本国内やアジア圏内の「芽」の育成にも役立てたいと考えます。

研究代表者 天野 文雄 (企画委員／大阪大学名誉教授)

「宗教が文化と社会に及ぼす生命力についての研究－禅をケーススタディとして－」(3 年計画)

長年、能楽の研究に携わってきた研究代表者は、世阿弥の制作になる能やその能楽論に禅が深いレベルで影響を及ぼしていることを知り、さらに、そのような現象が世阿弥や能だけではなく、絵画、書、彫刻等の美術、和歌、連歌、漢詩等の文学、茶等の芸能、作庭、建物等の建築といった芸術諸分野、さらには思想、政治、欧米の現代をも含めた社会生活にも認められることに想到して、禅の持つ「芸術や社会を触発する力(「生命力」)」について、その諸相を究明する必要性を痛感するにいたりしました。細分化が加速度的に進行している現代の人文研究にあって、最も求められているものは、たとえば「何のための研究か」という巨視

的な視点からの問いかけがあります。本研究が解明しようとしている禅の持つ力については、上記の各分野においても多かれ少なかれ考究されてはいますが、それには巨視的な視野がなく、ために上記各分野の禅にかかわる研究においては、ある常識的な理解に安住する結果になっているのではないかと思います。本研究により、そのような状況が変えられることによって、上記各分野の研究が思想というレベルで深められることを目指します。

本研究では、人文・社会学諸分野における「禅の生命力」の実態を整理・総括して、それを各分野における共通認識とすることを目標とします。

研究代表者 松岡 博 (フェロー／帝塚山大学法政策学部教授／大阪大学名誉教授)

「交渉学の可能性－新しい世界の関係構築と紛争の予防のために－」(3 年計画)

現代社会では、価値観の多様化、経済格差の拡大などの様々な要因のために、国際的にも国内的にも紛争・摩擦・対立が頻発しています。このような紛争・摩擦・対立を力によって解決するのではなく、対話と説得による交渉により、合意を形成し、平和的に解決すること、そのための学術(交渉学)の発展が強く求められています。

本研究では、交渉学が新しい世界を構築し、紛争を予防、解決するために、何をなし得るかを明らかにすることを目的とし、その目的を達成するための新しい交渉理論・交渉方法を提案する基礎的な原理をも明らかにすることを目指

します。

本研究により、力ではなく、対話と説得による交渉を中心とする新しい世界を構築すること、そして世界と人類が直面する様々な困難な課題を解決する新しい交渉学の可能性(芽)を切り拓きたいと考えます。このような交渉学の研究は、話し合いの伝統と平和的な紛争を国是とする日本から、平等互惠を基礎とした平和で豊かな新しい世界を構築することのできる、新しい交渉理論の提案に向けた基礎的原理を明らかにする試みであり、日本が学術の世界でないうる貢献であると考えます。

研究代表者 姫岡 とし子（東京大学大学院人文社会系研究科教授）

「ジェンダーからみた家族の将来」(3年計画)

社会のダイナミックな構造変化とともに少子化が進展し、家族が個人化・多様化する現在、世代をつなぐケアの必要性や親密な人間関係の形成を、もはや従来の制度的な家族の枠内だけでは考えられなくなっています。実際、諸外国では多様な家族の法的平等を実現し、個人や家族の多様な生き方に合わせた家族政策を採用しています。例えば、ヨーロッパでは、家族を従来の夫婦と子どもという制度的な家族に固定せずに、また家族の担う世代をこえたケアに企業や社会が協力する体制を推進しています。

本研究では、ジェンダーと家族の関係に注目し、1、歴史研究、2、現状分析と政策研究、3、国際比較の観点から家

族の将来の展望について考察します。

歴史研究では、ドイツと日本における近代化過程から現代までの家族の変化とその要因を分析します。現状分析では、社会変化と関連させながら、家族に関する言説、統計、実態報告、インタビューなどから家族の変化を把握し、家族政策の変化、ジェンダー政策や、経済界の動向などを国際比較の観点から考察し、将来の家族像と家族問題解決の道を模索します。研究の対象は日本およびドイツで、比較の観点から現状をより深く理解し、将来展望を描くためにアメリカとアジアを加える予定です。

研究代表者 山森 哲雄（企画委員／自然科学研究機構基礎生物学研究所教授）

「意識は分子生物学でどこまで解明できるか？」(3年計画)

「意識」とは、何物かに対する意識であって、それ自体に対するものではない。しかし、それでは、一体何に対するものであろうか？・・・この問題は、長らく哲学や心理学の分野で議論されてきましたが、定説は無いと言っても過言ではなく、科学的な対象ではないと考えられてきました。

これに対して、意識（consciousness）の問題は科学的議論の俎上に乗るとしたのは、Francis Crick と Christof Koch です。近年の分子生物学や神経科学の急速な進展に伴い、記憶や神経投射の基本的メカニズムの解明が進んできたことにより、これまで、学問的（少なくとも自然科学の）対

象としては、難しいと考えられていた意識の問題を、分子生物学や神経科学の成果の上に立って、解明することの可能性が期待されるようになりました。

分子生物学的アプローチにより、これまで遺伝学や免疫学の基本問題、更には、記憶や学習の分子機構についてほぼその概要を解明してきましたが、本研究は、意識に至る高次脳機能の解明に対して、この分子生物学的なボトムアップアプローチがどの程度有効であるかを問うものです。そのために、参加研究者と話題提供者の間で、それぞれの研究に即してこの問題を論じてみたいと考えます。

研究代表者 夢田 博一（大阪大学大学院基礎工学研究科教授）

「単分子エレクトロニクス現状認識と近未来実現へ向けての中核体制構築」(2年計画)

電子素子の微細化、高集積化技術の進歩はめざましく、ユビキタス社会の発展を支えています。一方で、素子の微細化に伴う誤動作の確率の増加や素子作製に必要な設備および素子そのものの消費電力が増大するといった問題が顕在化しており、高度情報化社会を引き続き発展させるためには早急に解決する必要があります。

単一分子を構成要素とする分子エレクトロニクスの実現は、量子性の活用により、電気を流すエレクトロニクスからの脱却を可能とし、さらには誤動作を自己修復したり、誤動作そのものを利用する新しい情報処理素子の創出が期

待できます。分子設計・合成技術、計測技術、理論の進展により、単一分子の電気伝導度をようやく定量的に議論できるようになりつつありますが、それでもなお現象の正しい理解はきわめて困難な状況にあります。

本研究では、分子エレクトロニクスの創成に熱意をもって取り組む研究者を中心に、スピントロニクスやフォトリクス、クオントロニクスの分野において第一線で活躍する研究者が自由にかつ積極的に行き来するハブ機能を持つ組織を構築し、現状の詳しい分析に基づいたロードマップの導出を目指します。

報 告



セルビア共和国よりハジェフスキー教授を招へいし、フェロー研究会シリーズを開催

フェロー研究会「レーザープラズマ物理とフォトンクス」をシリーズで開催するにあたり、セルビア共和国 ビンチャ原子力研究所のリュープチョ・ハジェフスキー (Ljupco Hadzievski) 教授を招へいした。同教授は 2010 年 3 月 21 日～4 月 7 日の間、国際高等研究所に三間とともに滞在し、相対論、プラズマ物理、フォトンクス等について 3 回の研究会を開催した。また、同教授は光産業創成大学院大学、京都大学、大阪大学、核融合科学研究所を訪問し、関連する研究者と研究交流を行ない、今後の共同研究計画につき

意見交換を行なった。

研究会には核融合科学研究所の Milos Skoric 教授や日本原子力研究開発機構の Sergei Bulanov 教授等在日外国人研究者 4 名を含め合計 11 名の第一線の物理学者を集め、研究の現状をレビューするとともに、レーザープラズマとフォトンクスとメタマテリアルにまたがる新学術の創成が議論された。

今回の日本滞在の印象について、ハジェフスキー教授より以下のように寄せられている。

(記：三間 囃興 高等研フェロー)

左から、三間フェロー・
ハジェフスキー教授・
尾池所長



The visit of International Institute for Advanced Studies was my fourth visit to Japan and it was the most exiting visit from two reasons.

The first one is scientific. Prof. Mima has organized a dense

scientific program which includes three Fellow Workshops on Laser Plasma Physics and Photonics (23 March, 26 March and 3 April) and number of visits to Sakabe Lab., Kyoto University, NIFS, Hamamatsu graduate school and Institute of Laser Engineering, Osaka University. It was exiting for me to discuss with the leading scientists about current status and perspectives on laser fusion, fundamental problems in strong laser plasma interaction and its applications, design, modeling and experiments with meta-materials. During the workshops and visits, we also discussed potential collaborations between Vinca Institute of Nuclear Sciences, Belgrade, Serbia and Japanese institutes, which include exchange of visits, participation at the conferences, training young scientists and students at the experimental laboratories in Japan, assistance in design and constructions some planned experimental facilities in Serbia, collaborative projects in theory, simulations and experiments. I believe that my visit substantially contributed to stimulating more intensive scientific collaboration between Japan and Serbia.

Beside my scientific activities, every day I was enjoying at the beautiful nature which in this period of cheery blossom, looks magical. Also, I enjoyed in company of my friends, Japanese food, rice sweets, fast trains, and unique excellent synergy of the modern technology with tradition.

紹介



「近未来の法モデルと法情報」を刊行 (3月31日)



- ・研究代表者：北川 善太郎
 - ・研究年度：2003～2009年度
(但し2009年度は報告書とりまとめ年)
 - ・サイズ：B5
 - ・頁数：本文200ページ (CD付録付)
 - ・価格：2,500円 (税込)
 - ・ISBNコード：978-4-906671-74-8
- お問い合わせ及び申し込みは、
(財)国際高等研究所事務局・学術出版担当まで
TEL：0774-73-4000 FAX：0774-73-4005

この報告書は、高等研における二つの研究課題、すなわち『共同研究の法モデル』(2003～2008)および『学術研究機関における学術情報システムのモデル構築』(2005～2008)のとりまとめである。

二つの研究課題は、高等研で実施した未来開拓学術研究推進事業『情報市場における近未来の法モデル』(1998～2003)の継続と発展である。一見すると別々の研究のようであるが、その5年間の研究プロジェクトが追求した研究と同根であり、また二つの研究課題はお互いに密接な関連をもっている。したがって本報告書は、その5年間の研究プロジェクトを視野に入れて、二つの研究課題が取り上げた「研究の流れ」を2部から8部に整理し、つぎに、最後の8部の研究共同体が研究の一到達点であるこ

とを述べる。ここで到達点というのは、「研究の流れ」の最後の研究部門である以上に、それが各研究部門の研究データを統合する場となることによって、インターネット上で機能する制度モデルが高等研の研究から創られたからである。(以下省略)

(本書「1部 報告書の概要 11.二つの研究課題」より)



紹介



「高等研報告書」・「高等研選書」刊行予定 (17 冊)

2010 年度は、以下の 17 冊の報告書と選書を予定していますが、研究成果の速やかな公表・活用を目指して高等研 W E B との連動を高めるなどメディアミックスの仕組みを検討していく計画です。17 冊と近年になく数多くを遅滞なく刊行するため、原稿作成から印刷・販売までの基準・ルールを整備し、作業効率の向上を図っていきます。また書籍販売方式の見直しの検討も行う予定です。



(1) 高等研報告書

2010 年度の高等研報告書は、2009 年度までに研究活動を終了した研究プロジェクトのうち、下記 13 編を報告書として出版する予定。そのうち 5 編は過年度分刊行予定の繰越分です。

研究プロジェクト	研究期間	研究代表者
① 学習の生物学（仮題）	2003年～2006年	星 元 紀
② 19世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究	2006年～2008年	吉 田 忠
③ 認識と運動における主体性の数理脳科学	2006年～2008年	沢 田 康 次
④ スキルと組織（仮題）	2006年～2008年	榎 木 哲 夫
⑤ 高度計測技術の発展と埋没	2007年～2008年	本 河 光 博
⑥ グローバリゼーションと市民社会（仮題）	2006年～2009年	仁 科 一 彦
⑦ 女性研究者と科学技術の未来（仮題）	2007年～2009年	伊 藤 厚 子
⑧ スンマとシステム～知のあり方～（仮題）	2007年～2009年	亀 本 洋
⑨ 細胞履歴に基づく植物の形態形成（仮題）	2007年～2009年	鎌 田 博
⑩ 生物進化の持続性と転移（仮題）	2007年～2009年	津 田 一 郎
⑪ 文化財保全技術（仮題）	2007年～2010年	志 水 隆 一
⑫ すきまの組織化（仮題）	2007年～2009年	鳥 海 光 弘
⑬ エネルギー科学における多階層連結コンピューティング（仮題）	2007年～2009年	三 間 罔 興

(2) 高等研選書

高等研公開講演会で好評を得た講演内容を基に編集し、選書として刊行・公表しています。2010 年度は次の 4 編を予定でうち 1 編は過年度刊行予定の繰越分です。

選書名	著 者
①「表情と対話：コミュニケーションの認知科学」	吉 川 左紀子
②「核なき世界を生きる～トリウム原子力と国際社会～」	亀 井 敬 史
③「能と京劇～日本と中国の演劇～」（仮題）	金 文 京
④「生活習慣病の面白健康科学」（仮題）	森 谷 敏 夫



事務局だより

「年度末の経理」

毎年の恒例、新年度を迎えると、経理部では決算作業に追われる日々が始まる。実際は3月の2週目で、前年度の実施事業を金銭面で〆切ることになる。毎年、この時期の前後に面白い場面に遭遇する。

聞き耳を立てていると、年度内に仕上げるはずの報告書の刊行時期の見込みが秒読みで変わっておりヤキモキの様子。こちらは経理なので、新年度に回れば今年度の予算執行減で、収支は少し良くなり、赤字補填の資金取崩しが軽減され、逆に新年度の予算が圧迫されることになるわけだが、なかなか年度〆の数字が届かないので、どうなっているのか、その顛末に『図らずも』興味深深となる。

仄聞するところ、論文並みの報告が作成されている様子である。沢山の研究者が参加しての研究会の記録・報告なので、原稿の揃踏みがなければ刊行とはいかないし、勿論内容のレベルの高さも問われる。…ということである。

経理としては、研究会参加の皆様が報告の質の向上に取り組まれることを応援したい気持ちは山々なのですが、さりとて、年度〆ができないと困った事態となります。

そこで是非是非のお願いですが、原稿の〆切期限遵守にご協力をいただきますようお願い申し上げます。（経理マン）



和室北側竹やぶの筍

お知らせ



「春の叙勲受章者」と「新事務局員の紹介」

1. 「春の叙勲受章者」

国際高等研究所 志村 令郎副所長が2010年度（平成22年度）春の叙勲受章者として瑞宝中綬章を受賞されました。

2. 「新事務局員の紹介」

奥田 文子さんを4月1日付にて採用。研究支援部に所属し、正副所長等研究者支援及び研究事業支援を担当します。

カレンダー



研究活動予定（5月1日～7月31日）

開催予定日	研究プロジェクト	研究代表者
5月 6日(木) ～ 7日(金)	研究成果のとりまとめ会合「エネルギー科学における多階層連結コンピューティング」	三 間 圀 興
5月20日(木)	文化財保全技術	志 水 隆 一
5月21日(金) ～ 22日(土)	2010年度第1回企画委員会	尾 池 和 夫
5月22日(土)	高等研公開講演会「能と京劇～日本と中国の演劇～」	金 文 京
5月28日(金) ～ 29日(土)	21世紀における文化としての設計科学と生産科学	岩 田 一 明
6月 4日(金) ～ 5日(土)	メタマテリアルの開発と応用	石 原 照 也
6月 8日(火) ～ 9日(水)	天地人-三才の世界：宇宙・地球と人間の関わり合いの新しいリテラシーの創造	尾 池 和 夫
6月11日(金) ～ 13日(日)	宇宙における生命の総合的考察とその研究戦略	海 部 宣 男
6月11日(金) ～ 13日(日)	研究成果のとりまとめ会合「すきまの組織化」	鳥 海 光 弘
6月12日(土)	第11回国際高等研究所「雅松庵」茶会	本 間 宗 寿
6月18日(金) ～ 19日(土)	法と倫理のコラボレーションー活気ある社会への規範形成ー	服 部 高 宏
7月 2日(金) ～ 3日(土)	受容から創造性へー近現代日本文学におけるスタンダードの場合	ジュリーブロック
7月 2日(金) ～ 3日(土)	交渉学の可能性ー新しい世界の関係構築と紛争の予防のために	松 岡 博
7月 3日(土)	21世紀における文化としての設計科学と生産科学	岩 田 一 明

カレンダー



高等研就業カレンダー（5月～7月）

■ 休業日（祝祭日を含む）

5

22日：公開講演会

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

6

12日：お茶会

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30			

7

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31